

# 大 好 き な も の

さいたま市立植水中学校 二年  
相 川 遥 香

「私の好きな食べものはごはんです。」  
私がこう答えるようになったのは中学一年のときです。

私の通っている中学校は、いちめん田んぼに囲まれた小さな中学校です。全校生徒は約二百人で、部活動は九つしかありません。もともと運動が苦手だった私は、文化部に入ろうと思っていました。文化部は、化学部、美術部、吹奏楽部の三つです。私は美術部か吹奏楽部に入ろうか迷っていましたが、入学式でみた入場と退場のときの吹奏楽部の演奏が忘れられなくて、吹奏楽部に入部しました。はじめは楽器を吹くのは難しいかも知れないけれど少し練習をすればうまくなる！と思っていました。しかし、夢にみていたものとはほど遠いものでした。私が担当することになったのは「ユーフォonium」という楽器でした。ユーフォoniumは、とても重くて最初は三十分持っているだけでうでがつかれてしまい、練習どころではありませんでした。はじめて曲の楽譜をもらい練習の成果を先生にみてもらいました。しかし、リズムや音程を外すことが多くてたくさん怒られてしまいました。そのとき私は、どうして友達はできているのに私はできないんだろうと泣きたい気持ちでいっぱいでした。そして、部活動が終わり家に帰ると部活のつかれと曲が吹けない悔しさと涙が止まらなくなり、大泣きしてしまいました。しばらくたって涙もおさまってきたころおなががすいて、キッチンの方へ行きました。そこには、お母さんが作ってくれたたきたてのごはんとみそ汁が置いてありました。食べると部活でつかれてとてもおなががすいていたので、本当にごはんがおいしく感じました。どんなに高級なものや世界一おいしいといわれているものよりも、そのときに食べたごはんの味は忘れられません。その日から私の好きな食べものはごはんになりました。好きなものがごはんだとお父さんにいうと、「米一粒一粒には十人の神様がいるから大切に食べなさい。」といわれます。昔、お父さんの祖父、つまり私の曾祖父は今私が住んでいる家で米屋を営んでいたそうです。曾祖父は、国から赤紙をもらい戦争に行ったそうです。曾祖父はけがはひどかったものの奇跡的に帰ってきたそうです。曾祖父は帰ってきた時に食べたごはんに私と同じように元気をもらい、悲しんでいる人たちに元気になってほしいという願いで米屋をはじめたそうです。

今も昔も、ごはんは私たち日本人に元気と笑顔をくれる食べものです。  
しかし、今は昔より簡単に食べものが手に入るようになり、食べ残しや食わずぎらいが増えています。実際、私も学校の給食などで野菜やごはんを残している友達をよくみかけます。

「食べないの？」  
と聞くと「きらいだから。」「おいしくないから。」といった答えがかえってきます。でも、世界には食で困っている人たちがたくさんいます。私は、小学五年生のときに、自分たちで作った米をマリ共和国という国に送るといふ授業をしました。米を送ってから何ヶ月後かに、お札の手紙がマリ共和国から送られてきました。それには、「ありがとう。」という文章がたくさん書かれています。こんなに喜んでくれる人たちがいるんだと思い、給食は残さずに食べようと心に決めていきます。すると、前まで苦手だった食べものがごはんやおかずと一緒に食べることでおいしく感じるようになりました。

これからも、私はごはんを大切に食べていきたいです。